

服部 健先生をしのぶ

池 上 二 良

本学会評議員服部 健先生は、平成3年10月25日八十二歳で逝去された。ここに謹んで哀悼の意を表す。御出生は明治42年7月25日である。先生は、四国の長宗我部元親を先祖とされる香宗我部家に生れたが、母方の服部家を継いで改姓されたと伺っている。昭和8年上智大学文学部独逸文学科を卒業し、10年から北海道帝国大学理学部でラテン語等を教えられた。20年に北海道立女子医学専門学校教授、25年には北海道学芸大学教授となり、ドイツ語や言語学概論を講じ、28年からは北海道大学文学部非常勤講師を兼任し、言語学概論やギリヤーク語学を講義された。43年からは、御自宅を移された東京において東京電機大学でドイツ語を教授された。

先生は、ものしずかで、温和、誠に誠実な御人柄であった。世俗的なものを望まず、また、放言高歌の酒席などは好かれなかった。本を好み、ひたすら言語学や民族学のような学問を愛した。駿河台の古書展にも、徳永康元先生と連れ立ってよく行かれたとほかの方から聞いている。

先生の生涯の御研究は、北方少数民族の一つであるギリヤーク族（ニヴフ族ともいう）の言語と文化についてであった。これは、大学で教えをうけた鳥居龍蔵教授のすすめによるという。このギリヤーク族のうち、先生の直接の研究対象となったのは、樺太東南部のニクブン族であり、その言語、ニクブン方言であった。昭和16年から18年にかけて、ニクブン人の居住する樺太の敷香をたずね、また札幌の自宅にニクブン人の方々を招き、ギリヤーク語の実地調査をおこない、研究をすすめられた。また、オロッコ語（ウイльта語）の調査研究もされた。ほかに、戦争中小樽に移送されていたアツ島のアレウト人の言語の調査（未発表）をされている。

先生の著述は、下記の学位論文におけるような音韻などの言語学固有の問題か

ら、労作「ギリヤークの親族呼称法」(『人類学雑誌』1942, 英訳もされている) などのような言語人類学・民族学的問題にまでわたり、またギリヤーク語概説(『世界言語概説』下, 研究社, 1955, 『言語学大辞典』1, 三省堂, 1988に所載) やギリヤーク文化の概説(『東亜民族要誌資料』1, 帝国学士院, 1944), また一般の方々にも読みやすい『ギリヤーク 民話と習俗』(札幌, 1956)の著書もある。著作は R. Jakobson et al., *Paleosiberian Peoples and Languages, A Bibliographical Guide* (New Haven, 1957) や『北アジア民族学論集』1(金沢大学, 1965)の著述目録に挙げられている。昭和37年, 学位論文 *Versuch einer Phonologie des Südostgiljakischen — Phonembestand, Verteilung und Alternation* を京都大学に提出, 文学博士(旧制)の学位を授与された。

戦前, 戦中の日本において, ギリヤーク語の研究が容易でなかったことは想像に難くない。ギリヤーク語に関係する研究文献は元来少ないので, 片々たる文献も貴重であり, これを丹念に探し集めることが必要である。さらに, その研究文献は, 市販刊行物が少ない上に, 外国, 特にソ連の文献は当時の状況から入手が困難であった。先生は実地調査をおこない, 研究をすすめるかたわら, こうした研究文献の蒐集に絶えずつとめられた。そしてまた, これを他人にもわかち与えた。筆者は複写したものをいろいろ戴き, 研究上多大の便宜をえたことを深く感謝している。

小さい言語の研究に当たっていると, 身近かに同じ言語の研究者がおらず, 刺激されることも少なく, また強い孤独感をもつものであるが, 1954年にギリヤーク語の実地研究のため米国から来日した少壮の R. Austerlitz (現在コロンビア大学教授) が網走に滞在し, その間およびその後も服部 健先生と親密な交流をもち, 互に啓発されるころは大きかったと思う。

一方, ソ連のギリヤーク語研究者との接触も戦後はおこなわれた。筆者はレーニンградで1960年 E. A. Крейнович や B. З. Панфилов から服部 健先生にあげる論文抜刷を托されたことがあったし, 1969年には Ч. М. Таксами が先生の著書『ギリヤーク』を示し, 一部の箇所の内容を知りたいというので, 筆者がかたことロシア語で訳して読んでいき, 同氏が聞きながら, 正しいロシア文にして書きとったこともあった。

日本におけるギリヤーク語研究は、江戸時代末期の松浦武四郎・岡本文平その他の単語採録にはじまり、大正はじめには金田一京助や中目 覚の調査研究がある。昭和になっては高橋盛孝そして服部 健がわが国のギリヤーク語研究をになってきた。地味な研究であるが、さらにあとにつづく日本のギリヤーク語研究者がこれをうけつぎ、研究をさらに発展させていくことは、今は亡き服部 健先生も念願されていたことであろうと思う。先生の御冥福を祈念する。